

CS-129 ハイウェイ・サイドタウンの造成デザインについて

立命館大学大学院理工学研究科 学生会員 間島 順哉
立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之

1. はじめに

近年の宅地造成では、大型土工機械が使われるようになったためと、敷地の有効利用ができる平場の面積の最大化が求められてきたために、画一的な大規模造成がされて、植生や土壌がはぎ取られ、地形環境が大きく改変されるようになってきた。大規模造成がされる以前の住宅地や、今日でも良質の別荘地では、地形の改変が最小限に抑えられ、豊かな自然環境と景観が保全されている。そこで、昭和40年に京都のデベロッパーによって開発された滋賀県甲賀郡甲西町ハイウェイ・サイドタウン（以下 サイドタウン）を対象に、既存地形を巧みに活用した小規模な土地造成による眺望、街路網、敷地割、擁壁など景観的特徴を、現地での観察や土地造成ソフトを利用して分析した。

2. 対象地の概要と分析

サイドタウン（図1）は、名神高速道路菩提寺PAの北側の南斜面に位置しており、緑の中に家屋が点在する住宅地である。サイドタウンの周辺の山は、花崗岩の風化した禿げ山であり、その敷地は、マサの堆積した荒地であった。名神高速道路の開業に合わせて、荒地地内の3本の河川も整備された。この荒地地に、サイドタウンは、自動車時代にふさわしい別荘地として名神高速道路の開業に合わせて造られた。一部の敷地は、昭和40年の流行語である「家付き、カー付き、パパ抜き」の標語で広告して、小さな別荘と当時のスバル付き（乗用車）で売り出された。



図1 現在のハイウェイ・サイドタウン全図

2-1. 道路網

東部の緩斜面は、河川に沿って放射状の街路と、それをつなぐ緩やかな曲線街路で出来ている。中央南側の傾斜面は格子状の街路網となっている。これに対し、北西部の急斜面の街路は、原地形にうまく納めており、切土・盛土を少なくしているために不規則なパターンとなっている。そのパターンは様々であり、等高線に沿ってトラバースする道（図2）、蛇行して登る坂道、小さな谷筋に沿って入り込む袋小路、斜面を急勾配で登る坂道などが混在しており、変化に富んでいる。このような複雑な道路において通行者は、カーブでは左右の敷地、登り坂では坂道、下り坂では坂道と周辺の眺望全体を注視する。高台からの眺望も良い。よって、通行者は視距が短くなり、変化に富んだ景観を楽しむことができる。また、沢の傾斜面を袋小路とし、その先の急斜面を階段にするなどの工夫（図3）も見られる。

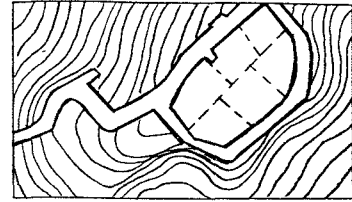


図2 等高線に沿った道

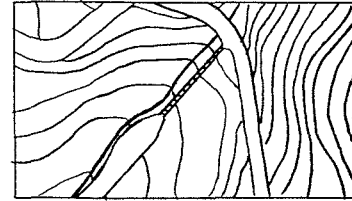


図3 袋小路と階段

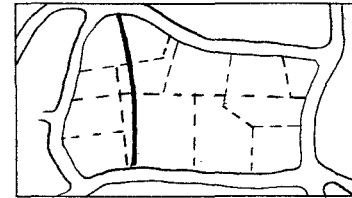


図4 小川を取り込んだ敷地

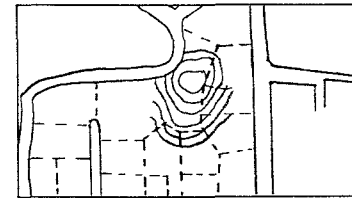


図5 丘を取り込んだ敷地

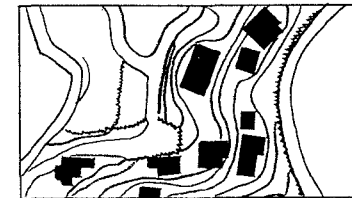


図6 等高線に沿った住宅の配置

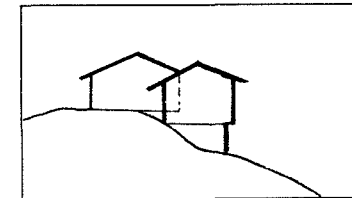


図7 階段住宅

2-2. 敷地割

近年、敷地割が細分化される傾向があるので、別荘地の敷地割の設計思想を読みとるために、ここでは開発当初の分割される以前の敷地割に関して検討する。中央南部の格子状の街路網における敷地は、おおむね四方形の均一の規模である。東部では、角地の敷地規模が不正形で大きくなっている。急斜面地の不規則な街路網では、多様な敷地の形状と規模になっていた。急斜面では、尾根線、谷線、等高線に平行な線で敷地境界線が設定されている。また、小川を取り込んだ谷線と平行な敷地境界（図4）や、小さな丘の頂きを取り込んだ敷地境界（図5）もあり、これらが遊びの多い魅力的な庭として活用されていた。

2-3. 宅地

京都の有力な造園業者によって、御影石の野面積みの石垣によって造成されている点が特徴的である。石積み为天端を揃えたり、角石・玄関前の石を大きな石にしたり、T字路の両側の石の姿を似せてゲート性を持たせる等の手法で、既存の地形環境と調和した景観を生み出している。今日では、野面積みができる石工は少なくなっており、こういった造成手法は難しいであろう。平面的に見ると、等高線に沿って建物を配置（図6）して、造成を最小限におさえている所が多くある。また、縦断的に見ると、傾斜地を利用して、眺望を確保しながら階段住宅（図7）にしている。

3. おわりに

このように、微地形を取り入れた敷地のなかで、出来るだけ自然との融合を図ろうという設計意図が見られる。ハイウェイ・サイドタウンは、微地形を活用した魅力的な住宅地として積極的に評価できた。